

# 教材開発例2 「強いものは美しい —日本人初の金メダリスト 織田幹雄—」

〔小学校高学年 主題：夢を実現させるために 内容項目：1の(2)〕



発達の段階を意識した  
資料構成の工夫

## 〈素材—織田幹雄さん—について〉

- オリンピックで、日本人として初めて金メダルを獲得した。
- 幾多の困難に負けず、自分を信じ、陸上競技一筋に努力し続けた。
- 日本陸上界に多大な功績を残した。



晩年の織田幹雄さん

明治38年	広島県海田市町（現安芸郡海田町）で誕生
大正13年	第8回オリンピックにて、三段跳び6位入賞
大正14年	早稲田大学入学
昭和3年	第9回オリンピックにて、三段跳びで優勝 日本人初の金メダリスト
昭和6年	大阪毎日新聞社のスポーツ記者となる
昭和7年	第10回オリンピックでは、足の故障で予選落ち
昭和39年	第18回オリンピック（東京）の日本陸上チーム 総監督
昭和42年	第1回織田幹雄記念陸上大会の開催（広島）
平成10年	享年93歳で没

織田幹雄さんの経歴

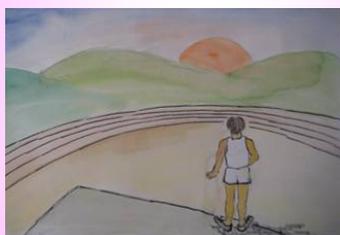
## 〈素材の選定、情報の収集のポイント〉

Q & A	
Q 1：人物のチャレンジ精神、力強い生き方、苦悩が感じられるものですか。	A 1：日本人初のオリンピック金メダリストという栄光の背景には、怪我や周りの批判などに打ち勝っていった姿があります。
Q 2：児童にとって、身近な地域に根ざしたものでですか。	A 2：海田小学校出身で、町内に織田幹雄さんゆかりのものが多数存在します。毎年4月に、織田幹雄記念陸上大会も開催されています。
Q 3：肖像権や著作権の確認と了承はどのように得ましたか。	A 3：織田幹雄さんの写真の使用については、町教育委員会に了解を得ました。（※ポールや碑については、学校で撮影）

## 〈資料「強いものは美しい」の作成〉

日本人初のオリンピック金メダリストという栄光の背景にある織田幹雄さんのチャレンジ精神、力強い生き方、苦悩に焦点を当て、内容を不撓不屈〔1の(2)〕として作成することとした。

「心のノート（小学校5・6年）」のp16～17を参考にし、高学年の内容〔1の(2)〕へ焦点化した資料となるよう、中心場面（山場）において、特に、大きな怪我や周りの批判等に負けず、一步一步努力し、夢を実現させた織田幹雄さんの姿を描いた。



第1稿

### 推敲の視点

構成チェック票⑥  
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

構成チェック票③  
「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

構成チェック票④  
「登場人物の取り合わせとやりとりに無理はないか」

最終稿

### 〈課題点〉

織田幹雄さんが陸上競技と出会い、オリンピックで金メダルを獲得するまでを順に描き、事実の羅列になってしまった。

### 〈改善点〉

野口さんの講習会に参加するようになった経緯やアムステルダムオリンピックの三段跳び以外の競技の結果を削除した。生い立ちや記録、実績についても、状況を把握する際に必要な最小限のものに絞った。

### 〈課題点〉

様々な場面で部分的に改善を図ったため、全体の流れの確認が不十分で、話の前後でつじつまが合わなくなってしまった。

### 〈改善点〉

全体の構成を再度見直し、主人公の行動や登場人物のやりとりに矛盾や飛躍がないように修正した。



## 強いものは美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー

海田町立海田小学校には、織田幹雄さんのオリンピック金メダル受賞を記念して、15メートル21センチメートルの長さのポールが立てられています。



明治38年、広島県海田市町（現在の安芸郡海田町）に生まれた織田幹雄さんは、小さいころから野山を駆け回る元気いっぱいの子どもでした。

運動が大好きだった幹雄さんが陸上に出会ったのは広島一中（現在の広島県立国泰寺高等学校）の二年生の時でした。ある日、教官から、第7回オリンピックに出場した野口源三郎さんの講習会に参加するようにすすめられました。幹雄さんの当時の身長は、155センチメートルでしたが、なんと高跳びでは、自分の背丈より高いバーを跳び越えたのです。それを見ていた野口さんが、「小さいのによく跳ぶね。君は練習すればきっと日本の代表になれるぞ。」と、声をかけてくれたのです。幹雄さんは、顔を真っ赤にして聞いていました。

そして、中学四年生の新学期、サッカー部をやめ、新しくできた徒歩部（陸上部）に入部しました。できたばかりの広島一中の徒歩部には、指導者もコーチもいませんでした。幹雄さんは、自分で本屋を歩き回り、数少ない跳躍に関する雑誌を参考に自分で工夫しながら練習を続けました。昼休みの鐘が鳴るとすぐに運動場を走り、放課後は最後まで練習していました。友だちが「もう帰ろう。」

と、言っても、

「もう少しやってから帰る。」

と、言って断りました。

誰もいなくなった運動場で、黙々と一人で練習を続けました。気がつくとも一番星が輝いていることもたびたびでした。休みの日も裏庭の小さな砂場で朝から晩まで練習に励みました。

やがて幹雄さんは、いろいろな大会の「走り高跳び」「走り幅跳び」「三段跳び」などで優勝を重ね、注目されるようになりました。

そして、第8回オリンピックに出場し、三段跳びで14メートル35センチの日本新記録を出し、日本陸上史上初の世界第6位入賞を果たしました。「すばらしい。」と誰もがその入賞を喜んでくれました。オリンピックが終わって、幹雄さんはすぐに次のオリンピックに向けて目標を立てました。

さらに幹雄さんの厳しい練習の日々がスタートしました。しかし、記録はなかなか思うように伸びませんでした。それどころか練習を続けるうちに、何回もひどい怪我をしてしまいました。

ある時、日本代表選手団の監督に、

「君、この足の怪我はひどい。放っておくと、一生陸上ができなくなるぞ。」

と、言われたこともありました。

やがて新聞などで「織田はもうこれ以上記録は伸びない」と書かれるようになりました。郷里の広島に帰れば、

「もう織田はだめなのでは。やめたほうがいいぞ。」



と、まわりの人からのささやきが幹雄さんの耳にも届くようになりました。それでも幹雄さんは黙々と練習を続けました。

「今日の練習も・・・やっぱり記録は伸びなかった・・・。」

沈んでいく夕日を前に一人たたずみ、頭をかかえこむ日が続いていました。それでも次の日になると、幹雄さんは、フィールドに立っていました。

「もう一度基本に戻ってみよう。」

改めて自分の練習方法、跳び方を振り返ってみました。

「今までのフォームは、外国の選手の物まねにすぎなかった。勢いにまかせて跳ぶのではなく、足の裏で大地をたたくと同時に、上に向かって伸びあがろうとしなければならない。伸びる力があってこそ“本物”の跳躍ができる。」

と考えました。それからは、上に向かって跳び上がる練習を繰り返し行いました。町で木の枝に跳びついたり、よその家の高い軒先にパッと跳び上がって触れたりしたものです。「高いもの」を見つけては跳びつき、自分の身体に跳躍力をつけることだけを考え、練習を黙々とこなす日々が続きました。

そして、ひと冬越して迎えた昭和2年、幹雄さんの記録がまた伸び始めました。

日本記録で優勝した幹雄さんは、再び、念願のオリンピックに出場を果たすことができたのです。昭和3年7月28日、第9回オリンピック・アムステルダム大会の幕は切って落とされました。

大会6日目、(今まで誰にも負けないだけの練習をしてきたのだ。あとは全力を尽くすのみだ。)と、思いながら窓の外を見ると、輝く太陽が昇っていました。

いよいよ得意の三段跳びです。今までの練習が頭の中をよぎりました。幹雄さんは渾身の力をこめて跳びました。15メートル21センチ。その後、その記録を抜く選手はあらわれませんでした。

アムステルダムの真っ青な大空にひらめく国旗は、太陽に照らされて光り輝いていました。それは誰も予想しなかった日本で初めての金メダルでした。大歓声の中、金メダルを手にした幹雄さんは、広い競技場に一人立っていました。そのほほには一筋の涙がこぼれていました。

その後、日本の陸上競技の発展に力を尽くされた幹雄さんは、「強いものは美しい」という言葉と海田小学校の運動場のあのポールに思いをたくし、93歳でなくなりました。



#### 【参考文献】

織田幹雄 (1997) 「織田幹雄 わが陸上人生」 日本図書センター

織田幹雄 (2001) 「陸上競技ヨーロッパ転戦記 日本は強かった 織田幹雄日記から」 有斐閣アカデミア